

# 25時行動委員会・富山

## 通信 6

2015.10.  
25時行動委員会・富山  
(090-7744-0122 藤岡)  
E-mail:25h.action@gmail.com  
Url:http://25h-action.blogspot.jp/

## 2015.8.30〈25時行動委員会〉

### ——「プロジェクト・〈ピープル〉の創り方」

以下は、「ラウンドテーブル」という生・労働・運動ネットの営みのひとコマを〈25時行動委員会〉がハイジャックならぬハイシャクした折に、提起したものの記録である。なお、「ラウンドテーブル・2015」のテーマは、「敗戦／戦後70年：騒乱譜——街頭をスイングさせる者の系譜」映像編"である。

## 第0回：〈ピープル〉が生まれる時

今日8月30日は、「全国総決起デー」みたいな日になっているようですね。国会議事堂前には言うまでもなく、列島各地で結構大きな、人が動く日とされています。全国規模で100万人になったらいい、という話もあるようです。聞いたところによりますと、今日の国会前の営みを呼びかけたグループと警察のあいだになにかあるやりとりがあるとかで、若干歩道をはみ出してもよいだろうということのようですけれども。はみ出すことに乗じて一挙に拡大することができるようなエネルギーと発想と力をもっている人たちが、東京に今どれだけいるか、大いに楽しみです。

われわれは、安倍の「戦争法案」を阻止する！安倍を打倒する！そのために、ある種の大きな行動をする。——今日の自分たちのように、闘争現地に行かない人間は、どう臨むか。大事なことは、戦略的な課題はどこにあるかを考えることだと思います。

では、用意した映像の方からスタートしたいと思います。（この後みんなで見えた映像は、〈25時行動委員会・富山〉ブログに収録されています。ぜひご覧ください。）



---

## 〈資料・1〉 「騒乱譜」 番外編 映像原稿

### 0.はじめに

忘却のかなたに追いやられたかにみえる記憶は、持続的に過去を想起し続ける想像力によって、現在の中に追体験される。

そして、過去は過去ではなくなり流動を始め、現在に向かって覚醒する。

この時、無意識のままに流されていた現在も流動を開始し、今を作る無意識は打破される。

### 1. 「敗戦／戦後70年 騒乱譜 街頭をスイングさせる者・たちの系譜」

### 2. タイトル「60年安保闘争」

60年安保国会闘争 2～3分の映像

### 3. 字幕 闘争ノ時ノ音ダケ入レル

我々はかつて60年安保闘争で、国会に突入した。

だがそれは、国会構内への突入にすぎなかった。

スコシアケテ、

それから55年

我々は安倍打倒・戦争法制粉碎に決起している。

我々は国会を包囲している、くり返し包囲している。

我々は次に何をなすべきか？何をなすべきか？

「総ぐるみ」でさらに十重二十重に国会を包囲する？

列島の無数の地域で決起する？

#### 4. 字幕－突然トイウ感じデ

提案する、提案する！

この空間を、「安倍打倒にむけて、我々は次に何をなすべきか」を論議する場所に変えよう諸君の同意を求める

どうだ、諸君、

諸君、どうだ？

#### 5. youtube 「台湾国会を学生ら占拠」 1:51

youtube 「ニコ生」台湾立法院（国会）を学生ら占拠で「歌」 3:27

#### 6. 字幕

諸君、台湾の学生たちの決起が、どうみえるか？

諸君、彼等の「街頭民主審議」・「立法院占拠」が、どうみえるか？

諸君、諸君は覚えているか？

#### 審議打ち切りノ映像ニカブセテ

去る7月15日の衆議院特別委員会での「審議打ち切り」のシーンを、

あの時の反対する野党議員たちの振る舞いを、小さなバナーを掲げ、おずおず小さな声をあげた彼等の行為を、諸君は覚えているか？

なぜ彼等は、国会を包囲している人々を、招き入れなかったのか？

なぜ彼等は、国会を、そこを占めるべき人々に、返さなかったのか？

「誰も残ルナ、皆ンナ消エロ！」－なぜ我々は、そう叫ばなかったのか？

なぜそう叫んで、我々は国会議事堂で「路上会合」をひらかなかったのか？

諸君、我々はいつから「議会主義者」になったのか？

#### 7. youtube

+1.Protest over China trade pact 1:55

+2.Taiwanese police clash with student protester 1:32

### +3.Student protest: Tiwan parliment overtaken by student 2:09

8. 突然トイウ感ジデ、字幕

21世紀の安保闘争の方へ！

21世紀の安保闘争の方へ！

21世紀の安保闘争の方へ

街頭民衆評議会運動を創りだせ！

「街頭民主審議」を！

9. 写真=60年安保闘争の国会写真ヲバックニ入レル

「光州虐殺 1980.5.18」の音ヲバックニ入レル

途中ニ字幕ヲ入レル

字幕ニカブセテ 「なびく旗」ノ写真ヲ入レル

「なびく旗」ニカブセテ 画面一杯ノ文字デ！

「騒乱は、論ずるよりも、断然やるほうがおもしろい」

街頭民衆評議会を！

「街頭民主審議」を！

安倍打倒！

歌ガ終ワルマデ字幕ヲ繰り返ス

「歌」ガ終ワッタラ

「@25時行動委員会2015・夏」ト入レル

10. 付録

Youtube <https://www.youtube.com/watch?v=U1agYWMah4E>

日本NHK電視台製「太陽花運動」紀録片 48:54

ゴチック体太字は、字幕

.....

いまみていただいた映像の作り方は、ある時代には、そんなに特別なことではなかったのです。〈68年〉といっているもののなかには、芸術の世界でもさまざまな試みがありました。映画なんかは、フランスに、ゴダールという有名な人がいますが、その人が当時やったことといえば、これまでの映画の概念をひっくり返すような試みにあふれていました。あるフィルムの流れに対して、なにか乱入してくるなんて当たり前っていう。映画といえはいつでもハリウ

ッドがモデルになっていて、創り手も観る側もハリウッド映画だと安心してしまう。「映画って、安心して観られないんだぞ」ということを、その連中はやろうとしていた。

「映像というものはどんなに信じられないものかということを考えてよう」というのが、〈68年〉当時の投げかけられた〈問い〉だったのです。「映像って安心して観てりゃそれでいいんだ、と思ったら大間違いだぞ」と。

いまの映像が取りあげていたのは、2014年3月の台湾での「太陽花（ひまわり）革命」です。台湾と中国とのあいだで結ぼうとしていた、サービス分野の市場開放をめざす「サービス貿易協定」の撤回を求めて、台湾の学生たちが、24日間にわたって立法院を「占拠」した闘争です。「占拠」といっても、映像で見てもらったらすぐ分かると思うのですがけれども、本気になって破ろうと思えばすぐに敗れるような、その程度のバリエーションでしかないのです。立法院の院長は、全く議論することすらなく、わずか30秒で議決してしまった与党のやり方がよくないという感じをもっていたらしいのです。だから、あまり強硬手段で排除するというのに、すぐには移らなかった。学生たちの行動は、台湾全島の多くの人に支持されていくわけです。院内の状況は、広報担当メンバーたちが、随時インターネットでライブ配信して、あっという間に大ニュースとなる。そうするといろんなところから支持の声が返信されてくる。立法院の外でも、次々とテントが設営され、学生たちをはじめ、学生たちを支持する人たちが数千人、数万人と集まって包囲しています。「人民議会」と書かれた垂れ幕があったり、「街頭審議」という言葉も結構出て来ます。立法院での審議じたいが「ブラックボックス」になっているということ象徴的に示す表現として「拒絶黒箱服貿」というよう言葉も出てきます。

はじめに、〈資料・0〉をみてください。これは、たまたま散髪屋でみた「毎日新聞」にあったものです。

#### 〈資料・0〉 関西政治ウオッチ：「デモ」できる象徴的空間を＝木村幹

毎日新聞 2015年08月28日 大阪朝刊

先月、とある事情により家族と共に東京に滞在する機会があった。せっかくの機会なので、子供に日ごろは見られないものを見せてやりたい、と思って選んだのは、国会前で繰り広げられていた安保法制に反対する大規模デモだった。将来、どのような政治的立場を取るにせよ、政治について考える機会を与えることは重要だ、と思ったからである。

子供たちと国会前を歩いて気づいたのは、この国には街頭での政治行動を行う環境が整っていないことだった。もっともそれは、かつてよく言われたように、日本にはデモ等の文化が根付いていない、ということではない。東日本大震災後の反原発デモをきっかけに、日本でも街頭における政治的活動への関心は高まった。多くの人が集まるようになったし、呼びかけ等の過程も洗練されてきた。



問題はむしろ、そういつて組織されたデモや集会を行う場所にある。例えば、東京における「デモの聖地」である国会前は単に道路が交差する場所に過ぎず、デモ隊の活動はその道路の狭い歩道の中に制限されている。だから安保法制の制定や原発再稼働に反対するデモのような何万人の規模になると、人々は同じ場所に集まれず、徒（いたづら）に長い列を作ることになっている。このような日本の状況は、他国とは大きく異なっている。例えば1960年代に行われたアメリカの公民権運動では、デモ隊はワシントンメモリアルの広い空間に集結した。韓国では景福宮前の光化門広場が名所になっており、大きな政治的問題が起こると必ずここで大規模デモが行われる。

重要なのは、市民には多くの人々がともに集い、より効率的に自らの政治的意思を表明するための「象徴的空間」が必要だということだ。古代ギリシャには「アゴラ」と呼ばれる議論の空間があり、民主主義はそこで育まれていったことはよく知られている。そして「アゴラ」の不在は、地方においてはさらに大きい。関西地方でも安保法制等を巡って大規模なデモが開催されるようになった。市民が自らの政治的意見を表明するための空間が必要になっている。

そもそも1600万人もの人々が住む世界有数の大都市圏の京阪神に、デモ等を満足にできる「象徴的空間」が存在しない、というのは、この地域の民主主義の発展にとっても足枷（あしかせ）となっている。活発な民主主義的議論の場の存在は、全国的な問題のみならず、地域の問題を議論する際にも必要だからである。中央・地方政府を巡る問題を、活発に議論できる空間を、作り上げていくことは、地域の活性化にも不可欠な筈（はず）だ。そのためには、自治体とデモ等を実施する市民団体の間での積極的な協調関係を意図的に構築することも必要だろう。それぞれの地域に政治的議論がいつでもできる場所を確保する。我々は、そんなことを考えるべき時期に来ている、のかもしれない。

みなさんは、これを読んでどう思われましたか。

僕は、ちょっとあきれかえったんです。

自分たちの〈空間〉というものは、全部「占拠」したりすることによって創り出すもの、生み出すものですよ。この人は、そういう観点が全然ないじゃないですか。こういう考え方が、今の時代にピッタリ合っているのでしょうか。（冗談じゃないよ、あほらしくてやってられないよ）と思いました。「デモ」できる象徴的空間を？！——「デモ」ができる？「デモ」ってするものだろ。して売ちとるものでしょ。それが、こういう感覚でものがみえてしまうということにすごくびっくりしました。いま日本の政治をめぐる状況の、ある種のあり方みたいなものがある意味では象徴的に表しているのでしょうか。

これを突破しなければ、話にならないと思います。その辺が僕らの課題でもあると思います。

話が変わりますが、富山の総曲輪フェリオ横のグランドプラザ。あれは、ストリートが屋内化されて、完全にストリートじゃなくなったわけです。そういう意味では、ストリートにする争奪戦というものは、いつでも起こっている。この街を、僕らがどう使うかという、その使い方のなかに、日常的なストリートをめぐる闘争がたえず起こっている。〈街頭〉を内部化してし

まって、そこをどんどんイベント空間にしていく。〈街頭〉で何かやるということが全然なくなって、パフォーマンス空間みたいなものがつくられていく。そういうことって、ものすごく反動的なことだと思います。次に、〈資料・3〉を見てください。

渡部治（おさむ）という、政治学者の人がいます。この人はどういう立場の人かというところ、ご存知の方はご存知だと思います。それなりの運動論的な枠組みをもって、とりわけ日本におけるネオリベの登場あたりから、この人たちのグループの分析というものがけっこうおもしろかったと、僕も思っています。この人が、今年の「世界」6月号に、「『戦後』日本の岐路で何をなすべきか」という文章を書いています。その一部を引用したものです。

### 〈資料・3〉

「

（前略）

60年以後の30年間、正面からの挑戦を受けなかった「戦後」超克の第三の岐路がやってきた。

自民党政権は過去の失敗の「教訓」から、改憲の新たな手法を選択した。「戦後」否定の正面突破としての明文改憲は、国民の戦争忌避意識を逆なでするので成功しない。憲法改変は当面、九条の文言をいじらずに、解釈改憲方式を先行させることとした。解釈改憲によって自衛隊をインド洋海域に、ついでイラクに派兵したのが小泉政権であった。しかし、政府解釈の制約下での自衛隊派兵には「武力行使できない」という大きな限界があり、改めて明文改憲による突破論が台頭した。自民党結党以来、初めて改憲草案が作成発表され、「任期中の憲法改正」を公約にして第1次安倍政権が誕生した。

ところが、自民党が危惧していたとおり、明文改憲の動きに対し、反対世論が立ち上がった。その代表的な存在が九条の会である。7500に上る九条の会の広がりにより、安倍政権の明文改憲の動きは挫折を余儀なくされ、それまで推進してきた自衛隊の海外派兵の動きも停滞を余儀なくされた。

第三の岐路で、自衛隊の派兵を許しながら、なお「戦後」を存続させた運動の新たな特徴は三つあった。

一つは運動の担い手の主力を占めてきた労働運動、革新政党の組織力の減退が起こったことである。まず、政党では「政治改革」の名の下で採用された小選挙区制の結果、社会党が解体した。現在、共産党、社民党という明確な護憲勢力は国会の三分の一をはるかに下回る勢力しか持ち得なくなった。労働運動も総評が解散し、全労連は改憲反対の立場だが、主力の民間単産、公共部門労働組合を引き継いだ連合は、もはや改憲反対のイニシアティブをとらなかった。

」

つぎの「第二に」というところは、現在にも関係するのでよく見てください。

「  
第二に、この時期には、市民運動の力量は大きく増大した。冷戦終焉以後、自衛隊の海外派兵に危機感を持つ市民運動がつくられ、しかもそれまでの市民運動に特徴的であった反政党的なスタイルを転換し、政党を含めた共同に積極的となった。総評に代わって政党間共同の調整役を果たす動きが現れた。2001年から毎年五月三日に開かれてきた「5・3憲法集会実行委員会」の取り組みは、共同を求めるこうした新しい市民運動の方向を象徴している。  
」

これが、現在の「総がかり行動」というものに至るものの元の型のことです。

市民運動というと、政党とは違うベクトルで動くものだという印象がありますけれども、この人たちは逆に、反政党的でなくなったというところで、すごく市民運動を評価しているわけです。

「  
第三に、政党や労働組合の状況、市民運動の増加を基礎に、新たな憲法の共同運動が生まれたことである。九条の会は、今までに見られない、緩やかなネットワーク型の組織として地域に広がり、根付いていった。改憲を阻む運動の広大な貯水池が生まれた。(後略)

(前略)

私たちは、戦後日本の第四の、そして最大の岐路に立っている。奇しくも戦後70年、メディアでは「戦後70年企画」が華やかであるが、戦争立法を巡って「戦後」の改廃を巡る正念場に立ち至っているという認識は幅広く共有されてはいない。「戦後」超克の企てを阻むには、改憲阻止を目標にした国民的共同の組織が必要である。

#### 改憲を阻む共同の課題

安倍政権の企てを阻むには、新たな条件を生かして国民的共同の闘いを組織することが緊急の課題である。

すでに第二次安倍政権の企てに危機感を持って、かつてない共同の試みが行われている。「解釈で憲法9条を壊すな！実行委員会」と「戦争をさせない1000人委員会」「憲法を守り・いかす共同センター」の三者が、「戦争させない・九条壊すな！総がかり行動実行委員会」として共同の組織を立ち上げた。2001年以来続けてきた5・3実行委員会が、今年はさらに大きな輪を作り、五月三日の集会に取り組んだ。こうした共同を強め、改憲阻止の共同組織をつくることが急務である。

ネットワーク型の連携の必要性は言うまでもないが、戦争立法や改憲発議を阻むには、同時に、国会の内外の動きを連動させて機敏な運動提起を行う組織が不可欠である。これとイメージの近い共同の経験として、2012年と14年の東京都知事選における共同が



挙げられよう。市民運動のイニシアチブで革新政党や労働組合が組織的に結集し、保守的な層とも連携して集中的に運動を作り出した最新の経験である。(中略)

### 政党の役割と共同への参加

第三に、国民的共同のメンバーとして、改憲に反対する政党が加わるべきだということである。戦争立法阻止をはじめ改憲を阻むための大きな舞台は国会である。言うまでもなく国会において政党の果たす役割と責任は重い。国会での機敏な追求や反対討論がなければ、戦争立法と改憲を阻むことはできない。院内においても戦争立法に反対する共同の成立が急がなければならない。(後略)

」

だからこそ、改憲に明確に反対する政党が、そういう大きな「総がかり行動実行委員会」などと連動してそこをリードすることが必要だ、と。

だから、市民運動を含むそういう運動のつながりができてくると、それを評価しつつ、だけど、結局要は国会が大きな舞台なんだ、ということになる。

それから、〈資料・4-2〉を見てください。

これは、「10+1」(テンプラスワン)という、建築系の雑誌で、INAXが出している大変ユニークな雑誌です。インターネットのサイトに、「10+1」の編集者たちが、結構いろんな文章を入れているんです。これは、2014年冬に出たものです。

### 〈資料・4-2〉

「

「ひまわり革命／傘の革命／しばき隊・カウンターデモ—路上の政治へ」

五野井郁夫 (国際政治学者・高千穂大学准教授)

### ひまわり革命

2014年3月に、台湾で前代未聞の出来事が起きた。台湾の議会に当たる立法院に、数百人の学生が入り口を封鎖し、立てこもり始めたのである。学生らは「ひまわり運動 (sunflower movement)」の名でfacebook上にメッセージを発信し始め、それに呼応し、多くの市民がひまわりを意味する黄色のはちまきをして集まった。

学生たちがこの行動を起こしたのは2013年6月に調印された中台サービス貿易協定が原因だ。この協定の批准を巡って議会は紛糾した結果、与党は多数派を頼りに強行採決を行い、野党は台湾の中小企業がダメージを受けるとして猛反発したが、議会審議はたったの30秒で打ち切られてしまった。この「30秒審議」は民衆には支持されず、台湾の民主主義の否定と人々が受け取ったのだ。人口約2300万人のうち約三分の一にあたる700万人がサービス業だが、協定を結んだら若者の雇用が脅かされるため、特に学生たちが

協定の白紙撤回と民主的な議論を訴え立法院占拠を行ったのだ。

この議会占拠を巡って、立法院の周囲には次々とテントが設営され、支持者は日ごとに増え続け、ついには1万人ほどの支持者が訪れた。24日間、放水での攻撃をされても学生たちは耐え抜き、ついに台湾政府との交渉から譲歩を引き出した。(中略)

## 最近の都市空間におけるデモの現状：非暴力とメディアの支持

これらの東アジア地域での路上の抗議行動やデモ、そしてカウンターには様々な共通点がある。まず、非暴力であることだ。どんなに高邁な理想があっても暴力の使用を許可しない。非暴力を貫き、「暴力的」な政府やヘイト・デモと「非暴力」の抗議者という構図を出現させられなければ、参加者はもちろん、取り巻く々と世論、そしてメディアの支持を取り付けることはできない。

台湾や香港では、現場に集まってきた学生たちは泊まり込みで平和的に応援し始めるようになる。国際世論の支持も抗議側に傾き強制排除は難しくなった中、台湾では学生が勝利を確信して非暴力のうちに「自主的」撤去をした。

「しばき隊」などのヘイト・デモに対するカウンターも、自分たちの側に法的正当性を付与するために、また誰でも参加できるようにするために、非暴力を掲げる。「カウンター」の側からは決して先には手は出さない。結果、路上での戦端は差別主義者や警察によって開かれ、もみ合いとなる場面が多く見られた。これらのどの運動とも、警察官の強制排除に抗しつつ、かつ報道で映える場面として、座り込みやダイ・インへと戦術を即座に変えた。路上に寝そべった無抵抗の抗議者を強引に引っ張っていくのはいかにも暴力的に見えるからだ。

## これまでと違う変化の諸相と背景：ネット、互酬の公共空間

いずれの運動も、参加者はfacebookやtwitterなどのネット情報を頼りに集まってきた。これは「しばき隊」でも見られたことである。このネット情報を見た支持者らによって、水や食べ物、プラカード等は、全て市民たちからのカンパと支援だけで成り立っていたことも特記すべきだろう。台湾でも香港でも、新大久保等のカウンターでも、みな互いに与え合い、路上の自主清掃にも余念がなかった。かつてマルセル・モースが描いて見せた、贈与や互酬といった交換原理が、超資本主義社会の都市で路上が開放された公共空間の風景として復活したのである。

抗議参加者らはこうした贈与や互酬の原理を情報分野にも適用した。路上のテントには無料のWi-Fiも設置し、抗議に関する情報を逐一ウェブ上にアップロードできるようにしていた。こうしたサイバースペースという公共空間でも、現実の公共空間と平行に情報のシェアや発信を対外的な情報発信も活用した。かれらは占拠運動の正当性と人々からの支持を海外発信し、民主的正統性と政府の横暴を各国語で世界中の世論に訴え

ていった。実際に台湾についてはアイ＝ウェイウェイやノーム・チョムスキーが、香港は村上春樹ら世界的知識人が相次いで賛意を表明し、抗議参加者らの声に応えた。

## 路上の政治、再び

民主主義か否かに関係なく、このように路上の政治が再び戻ってきた。民主主義ではない国では民主主義と正当を求める運動として、民主主義国では議会政治の機能不全を目の当たりにした人が議会外での民主主義と正義を求める運動として、既存の政治体制に対して様々な抵抗運動を自己組織的に起こすことによって、世界中で既存の政治のモードや統治性の転換を図ろうとしている。この路上の政治は、議会政治のトラックに運動を乗せることができる場合もあれば、各国の政治体制が脅威と感じる閾値を超える叛乱として表出した際には、鎮圧が容赦なく推し進められる場合もあった。

これら路上の政治という状況は、なにも今に始まったことではない。2000年代後半から、新しいアナキズムの形式として既存の形式とは異なるラディカル・デモクラシーの運動が、あるいは「オキュパイ (Occupy)」という形式で立ち上がってきた。

人々は、受動的に受け止めるだけのペシミスティックな認識から、現状が不正義な状態にあるとする認識と、その不正義を自らの力で変えうるという認識を持ちつつあり、それらを実行に移すようになってきたのだ。不正義に対する怒りを契機とし是正を求める都市での叛乱は、一連のアラブのカイロ・タハリール広場、マドリードやリスボン等のM15運動の広場という公共空間で、議会外での直接民主主義の表現として、不正義状態を是正しようとするラディカル・デモクラシーとしてのデモと占拠に人々を向かわせることとなった。その反復が各都市の特性とのコンビネーションによって差延し、ニューヨーク、ロンドン、東京の官邸前、香港、台湾、そして各都市へと世界中へまたたく間にウェブを媒介として波及する過程で、当初のコピーからバナキュラーな場でのそれぞれの都市のオリジナリティーが開花していったのである。 」

次のものは、2012年に五野井郁夫という人が出した、「[デモ] とは何か」の中に書かれていたものです。この題は編集部がつけたのでしょうか。

### 〈資料・4-2〉

「

五野井郁夫『「デモ」とは何か—変貌する直接民主主義』(NHK出版、2012)

### ラディカル・デモクラシーの劇場としての都市空間

ラディカル・デモクラシーといえばエルネスト・ラクラウとシャンタル・ムフらが1980

年代後半頃から、ポスト・マルクス主義の文脈で従来のリベラル・デモクラシーに替わるものとして提起した概念など、様々な論者が様々な文脈でこの言葉を使ってきた。それらの共通点は、政治が技術的な行政国家現象や市場による生活世界の支配から闘技 (agon) によって「政治的なもの」を再興しながら、民主主義をより根源的に再生させるものだ。これら近年のラディカル・デモクラシー論には二つの方向性がある。ひとつは、ヘゲモニーに対してカウンターヘゲモニーを都市空間の中で戦略的に差し込んでいく、ラクラウとムフ、ウィリアム・コノリーらの議論に代表される立場だ。ラカン的な意味での欠如を埋めていく運動ともいえる。ここでのヘゲモニーに実践は、カウンター・ヘゲモニーを立てて都市のヘゲモニー空間をデモし周囲の空間を占拠することで差異化、多元化 (pluralization) を推し進めていくものだ。

もう一つは、ジル・ドゥルーズやデリダ、ネグリらによる、カウンター・ヘゲモニーを立てること自体がヘゲモニー再生産の連鎖となるため、それらに抗する形で、ノン・ヘゲモニックなラディカル・デモクラシーを志向する立場である。ラカンの云うところの不在対象を目指し続けるヘゲモニー闘争としてのラディカル・デモクラシーは、その不在対象を中心とする超越論的構成から脱することができないとノン・ヘゲモニーを志向する立場から批判される。そしてむしろラカン的な欠落でなく逆に過剰さ (abundance) という、人々の溢れ出る潜勢力の中から絶えず生成される差異化の力のうちにラディカル・デモクラシーが模索されるのである。

」

「過剰さ (abundance) という、人々の溢れ出る潜勢力の中から絶えず生成される差異化の力のうちにラディカル・デモクラシーが模索されるのである。」—わからないけど、僕はここだけが気に入っています。

#### 〈資料・4-2〉

「

#### ヘゲモニーを目指さない政治が変える都市の風景

それは、やや古めかしいが的確な表現を借りるならば「民主主義の永久革命」(丸山眞男)として、既存のデモクラシーに満足せず絶えず抗し続ける営為である。かれらは、ベンヤミンが『パサージュ論』の冒頭で唾棄してみせたような既存のヘゲモニーの空間を都市の陳腐なモニュメントに墮していない、何でもない場所でデモや占拠をし、絶えざる差異化のもと、まるで『不思議の国のアリス』の登場人物がやって見せたように、新たな何かへと生成変化を遂げてゆこうと試行する。

いまやデモの日常化に看取されるごとく、ヘゲモニーを目指さない政治として都市空間において、日常的に我々の前へと立ち現れ、我々をも巻き込んでゆく風景である。このような風景が都市を舞台に、いまアジアと世界の路上でグローバルな不正義に抗し、民主主義を求める永久革命として立ち現れつつあるのだ。これら近年の路上での正義と民

主主義を求める動きは、都市のそのものの風景のみならず都市や文化と我々の関係性をも、知らず知らずのうちに変容させてゆくのである。

」  
〔10+ 1〕 2015・ 1〕

2012年、首相官邸前に原発再稼働に反対する大規模なデモが行われ、ソーシャル・ネットワークの呼びかけで多くの人が集まったので、中東の「ジャスミン革命」にならい、「紫陽花（あじさい）革命」なんて言われたりしましたね、流行らなかったけれど。その後、台湾の「太陽花（ひまわり）革命」と呼ばれたものがあり、それから香港の「雨傘革命」がありました。そういう流れが、世界的な〈オキュパイ〉の流れとして、ずーっと切れないうちま続いているということですね。

それで、今回の安倍の「戦争法案」に反対する国会議事堂前デモも、こういうことの流れの中に位置づけようと、この人たちは思っていると思います。そこはちょっとな、と思いますが。

それから、〈資料・4-3〉を見てください。

これは、先ほどの台湾の立法院「占拠」に関して、子安宣邦（こやすのぶくに）という人が書いた文章です。

この人は、こういう政治的な課題を追う人では全然なくて、もともとは思想史専攻の人です。たしか、江戸時代の思想史みたいなことをやっていたと思います。そしてある段階から、中国思想の研究をし始めます。「〈アジア〉はどう語られてきたか」などの本がありまして、いろいろ勉強になりました。今年の4月にも、「帝国か民主か—中国と東アジア問題」という本が出ました。その中の一部に、今の台湾の「太陽花革命」のことがふれられていました。

#### 〈資料・4-3〉

「

日本の新聞（朝日、四月八日）にも報じられているように台湾の立法院を占拠していた太陽花運動の学生たちは、中台貿易協定の協議内容、審議過程についての「監督条例」の成立まで貿易協定の立法院における審議は先送りするという王金平立法院長の裁定を受け入れる形で、占拠していた立法院の本会議場を撤収することにしたという。事実予告通り10日に、学生は太陽花を手にして占拠していた立法院の本会議場を退出した。

だがこれは決して敗北による撤退ではない。これは一定の勝利を確信した上での立法院の内部から外部への、すなわち全土の市民たちの内部への運動のより深く、より広い浸透と拡大を意図した撤収である。私は台北で抗議運動の学生たちに接して、我々が日本で体験した学生運動とは全く異質のものであることを知った。私は日本の学生運動や大衆運動の体験から台湾の今回の学生運動への助言を求められたが、私はむしろ「あなた方に教えられた」と答えた。私がせめてもいったのは、「悲劇的な自滅で終わるような運動であってはならない」という日本の学生運動が与えたマイナスの教訓であった。その

言葉に私を立法院内に案内してくれた呉氏は、「それは心配ない。彼らは徹底的に明るい」と笑って答えた。たしかに〈太陽花運動〉その名の通り、開放的な、誰でもそこに座り込み、加わることのできる運動であった。

運動をリードする学生たちの言葉も、われわれの耳底になお残り続けている、あの孤立したエリート学生たちのひとりよがりの絶叫ではなかった。立法院の学生による占拠という実力行使的行動も、国家のゲヴァルトを必ず呼び出すことになる学生のゲヴァルト的行動ではない。それは政府によって割愛され、拒否され、立法院自身も放棄してしまった〈審議〉を、もう一度徹底的に隠すことなく行うべきことを要求する学生たちによる議会内の座り込み（オキュペーション）であった。これは立法院における民主的審議を要求する〈民主的な決起〉なのである。したがって立法院外の路上に座り込む学生たちによってなされていったのは、立法院が放棄した〈審議〉を民間において取り戻す〈公民審議〉という街頭教室であったのである。非暴力的座り込みと〈公民審議〉とはこの〈太陽花〉運動の特色である。

私も立法院外の路上で行われた「街頭民主審議」に立ち会った。それは台湾市民の情報管理を巡る深刻な問題を含む〈電信サービス〉貿易協定を主題にするものであった。数百人の学生・市民が路上教室に座り込んだ。台湾人の情報の管理を巡って深刻な問題を提起する〈電信サービス〉協定について立法院では審議らしい審議はなされていないという。専門家による解説的講義の後に参加者たちは十数人単位のグループに分かれ、疑問を出し合い、討議し、その結果をレポートにまとめていく。それらのレポートは意見書に集約され、立法院や行政府に送付される。この街頭教室による〈公民審議〉の過程はインターネットによって市民の間に流される。

私が何よりもこの〈公民審議〉の運動に注目するのは、政治的核心問題についての市民的レベルでの公開的な審議によって、その問題の全貌の民主的領有がはかられていることである。我々はいま戦後日本の安全保障的国家戦略の転換ともいいうる〈集団的自衛権〉の政府による憲法解釈的な容認という問題に直面している。国家国民の安全に関わるこの大事が、一切の民主的審議を経ることなく、一政府の了解でなされようとしている事態に、我々はいったい何をしているというのだろうか。安倍たちの独善的な憲法解釈を阻止するような国会の審議もないというのなら、我々市民が国会周辺に座り込んで審議すればよい。私は台北の「街頭民主審議」に接して、我々に欠けていることは何かを教えられた。

（後略）

」

（子安宣邦「帝国か民主か—中国と東アジア問題」社会評論社2015）

この人の文章は、〈公民審議〉というのかな、「街頭民主審議」の方に力点がおかれているという感じがします。

現在の日本の国会議事堂前のデモに集まっている人たちは、〈審議〉ということばを、あんなに持ちこんではいけないと思います。「国会周辺に座り込んで、〈審議〉しよう」、と。台湾のような路上の「占拠」のしかたを持続すれば、それこそ、国家緊急権の発動対象になる事態



をつくるということになると思います。それはもう、とてつもない話です。安倍は、本当をい  
えば、憲法を改憲して「国家緊急権の発動」ということをもり込みたくてうずうずしている。  
だけど、いまのところ話はそこにいいませんね、「解釈改憲」のほうへいつちゃってるか  
ら。ほんとうに文字通り「改憲」になれば、「国家緊急権」の問題も必ず大きくクローズアッ  
プされます。

政治言語というもの—「デモ」だとか「路上を占拠する」とか、「国家緊急権」が発動され  
るとかされないとか、そういう政治をみていくときの大事な言語が、事を大きくつかむための  
言語が、僕らからどんどん失われてしまっているような気がします。

今度は、〈資料・4-1〉を見てください。

### 〈資料・4-1〉

## 革命のつくり方 台湾ひまわり運動—対抗運動の創造性

2014年10月13日書店発売

港千尋 著・写真



今年3月に起こり、歴史に残る成功例となった  
台湾の学生と市民による代議制政治への対抗運動。  
80年代から群衆の反乱を注視し続けてきた港千尋によ  
る、  
希望の革命の全貌を伝える世界で唯一の現場レポート。  
これは民主主義が失効した日本の現状を南から撃つ、  
群衆の勝利の記録である。

2014年3月、台湾で起きた学生による台湾立法院（国  
会）占拠。国民党政権による中国とのサービス貿易協  
定の締結強行に端を発したこの事件は、代表制民主主  
義への危機感を背景にたちまち全土に拡がり、3月30日には台北で50万人規模のデモ、  
また運動の拡大は台湾第四原発をも建設停止に追い込んだ。この「ひまわり運動」＝  
革命、の現場に立ち会い、立法院の中にとどまりつづけた港千尋による、カラーを含む  
多数の写真を交えた克明なレポート。非暴力と組織力によって歴史に残る成功例となっ  
た、若者たちによる「ひまわり運動」の詳細を記録し、これからの対抗運動の創造的な  
ありかたを伝える希望の書。

(「INSCRIPT」)

これは、本の表紙と宣伝文句の一部なんです。

港千尋という人で、写真もやっているし、けっこう「群衆論」も書いていて、「群衆の反乱」  
をずっと追ってきている人です。群衆の路上でのうごきを、このかんの〈オキュパイ〉といわ  
れるものも含めてフォローしていて、その最後のところで「太陽花革命」にもふれている、そ  
ういう本です。「INSCRIPT」という、非常に凝った本を創る出版社から出ています。大変おも

しろいです。(補註・「太陽花革命」については、柄谷行人・港千尋・台湾からの二人によるシンポ「新たな対抗運動の可能性」社会運動 2014・11) がとても刺激的だ。)

「革命のつくり方」—こんなふう気軽に「革命」なんて言っちゃう方がいいのでしょうか。僕らのように古い世代が「革命」と言ってたときの大文字の「革命」じゃなくて、ものごとが大きく変化することの表れみたいなものを。台湾の「太陽花革命」のようないとなみの累積を抜きにして、大きくひっくり返ることもないわけですから。そういう意味では、「革命のつくり方」とか「太陽花革命」とか「雨傘革命」とか言ってみることも、大事なんでしょうと思います。僕にはむしろ、「騒乱のつくり方」といった方がピンとくるのですけれども。

「騒乱」の担い手、さらには「革命」の担い手にもなりうる存在として、〈ピープル〉というものを考えるとすれば、「いつだって人は〈ピープル〉になれるんだ」ってことを、権力に思い知らせていくことの蓄積が必要だと思うのです。〈人々が民衆になる〉—まさに「騒乱の累積」が、あるところで質的に変化することがあるんだってことを創っていかなければいけないと思います。

その累積ということの考え方を間違えると、議会制民主主義的に累積を考えてしまう。「そうじゃないんだ！」ということの側から累積をはかりつつ、歴史をたえず捉え返していきながら、われ・われの運動の水準は現在ここにある、次はここにいくべきだ、ということ提起していかなければいけないのだと思います。

本当は、敗戦／戦後70年の歴史のなかでの、日本の大きな〈騒乱の系譜〉みたいなものをたどりたい、という想いがあります。けれどもどうも、「そんなことやってたらまどろっこしいなあ」と思って、急ぎよ今日みてもらったものをつくって考えたいと思ったのです。非常に短い乱暴なものですけれども。

台湾の状況と、日本の現在の「戦争法制」をめぐる状況とは、決して同じではありませんし、もちろん比較できないことです。けれども、台湾の行動というのは、やっぱりすごくいいなと思えるわけです。どうして日本の場合には、国会議事堂を「占拠」しないのだろうか？と思います。日本でかつて一度も、議場じたいを「占拠」したことはないのですね。「60年安保国会闘争」のとき、「国会構内に突入しただけじゃないか」と言った人がいました。全学連のリーダーの誰かが、「国会はわれわれのものだ。われわれがここに入ってくるのはあたりまえだ」と、アジテーションしたそうです。現在も、安倍打倒！「戦争法案」粉碎！へ向けて、国会を繰り返し繰り返し包囲していますね。今日なんかは、ひとつのピークになるのでしょうか。しかし、いわゆる「総がかり行動」ということでさらに十重二十重に国会を包囲していくことが求められるのは、どうなのでしょう。

〈資料・2-1〉を見てください。

### 〈資料・2-1〉

いろいろな人が、いろんなところから出てくる。人があふれてしまう。人が、労働者であるとか、学生であるとか、主婦であるとか、女性であるとかという、自分を規定している社会的／政治的な規定力／規定性、そこからあふれててしまう！人が、この社会のなかで生きているときに、否応なしにその属性に照らして、なにか規定されてしまう。あるネーミングをされてしまう。そのネーミングをとっばらって、人が動いてしまうときがある！そのときに生まれてくる主体というものを、私は、「ピープル」と言ったらいいのではないかと考えています。ですから、「ピープル」の萌芽みたいなものが、60年安保闘争のなかで生まれていた、と言っていいのではないかと、私は思います。このことは、日本の運動のなかでは、かなり大きな意味を現在でももっているように思います。

それに対して、現在の「戦争法制」反対の運動というのは、残念ながら、自分を規定している規定性からあふれ出るような人びとの動きがあるようには思えません。「憲法を護る」、「立憲主義を守る」—どうしてもやっぱり、そういう規定性のなかに自分をおいてることから出ない／出られない、といたしますか……。

そこが、現在の運動と60年安保闘争との大きな違いであると、私は考えています。人びとが、自分に与えられている規定性を破って、あふれててしまう。そのことが、人間のある根源的な欲求としてでてくる。それが非常に大事なことであって、そういうことの前では、「議会制民主主義を守れ」ということはたかが知れたことだというように、私は思います。「守る」ということで言っている限り、人びとは、自分に与えられている社会的規定性を破っていない。残念ですけれども、それが、このかんのずっと日本の運動のもっているあり方ではないかと思えます。

(2015.6 25時行動委員会・トークセッション：「60年安保闘争から55年 21世紀の安保闘争の方へ」)

これは、25時行動委員会をスタートさせた6月14日に、「60年安保闘争」についての映像をみた後の〈トークセッション〉で、僕が話したことの一部分です。いい悪いを除いて、かなり全国的に、現在の「戦争法案」反対の運動が大きなひろがりをもってきている。けれども、それを凝集する力みたいなものがないのではないかと、という話しをしました。私は、「60年安保闘争」にしたって、「あれ以上のことには、なりようがなかったんだろうな」という思いが、一方ではあるのですけれども。

さらに〈資料・2-0〉を見てください。

### 〈資料・2-0〉

(前略)

今号の「FOCUS」のコーナーの末尾でふれたように、この間の私・たちの「安倍のつくる未来はいらない」の〈前〉線の創出という関心からは、三宅洋平の「選挙フェス」のありようを、「路上（ストリート）の群集評議会」！？と言ってみたい誘惑が避けがたい。

むろん安易にそのような言辞を弄したいわけではない。私・たちは、「革命期」に生起し、「革命権力」によってその営みを篡奪されてきた民衆（ピープル）の「憲法制定権力」の原基形態としての「評議会という幻想」にとりつかれてはきたが、それが非望の遠い夢であることを、自覚していないことはない。「路上の」・「群集」と言っていることに、注意して欲しいし、「選挙フェス」にはしっている「議会制」への無邪気なベクトルをみないでいるわけでもない。このたびの「選挙フェス」がその狙いを実現するには、あたかも三宅洋平は永遠の「候補者」であり続けなければならないかのようにもみえる。

しかし、私たちは、したり顔をしてそれを見物していればいいというようなところに、立っているわけではない。その「選挙フェス」が、三宅洋平が永遠の「候補者」であり続けなければならないようなものとしてあるということは、既往のタームで言えば、「議会内政治勢力と社会諸運動」のブロックのありようの問題に他ならない。

とすれば、問われているのは、私たちなのではないか。とりわけ、「B感覚」の系譜を生き＝行き継ごうとしてきた私たちなのではないか。「議会内政治勢力＋社会諸運動」のブロックを、久しく空位においてきたのは、私たちではないのか。三宅洋平の挑戦をおしあげるにたる安部政権にむきあう社会諸運動の連合を、なお創出することができないでいるのは、私たちではないのか。

「路上の群集評議会」が「路上の群衆評議会」に、「路上の民衆（ピープル）評議会」に、そして、〈民衆（ピープル）評議会〉に生成変化するという夢を手放さないかぎり、「三宅洋平現象」からその「選挙フェス」の可能性を読み尽くさなければならないのは、私たちではないのか。この「戦争の出来る国」へ向けたセキュリティ装置の著しい亢進の時に、その機能の喪失の極みにあるかのような「議会制を超える議会制」（\*17）ににじり寄る試みに挑戦しなければならないのは、私たちではないのか。（\*18）・・（後略）

「拒否の〈前〉線情報」No. 4 (2014.5)

私・たちは、生・労働・運動ネットの営みとして、2013年7月～2014年10月にかけて、『拒否の〈前〉線情報』というものを5号まで発行しました。その4号で、この列島のストリートに生起してきた「B感覚」の、3. 11以後現在までの流れをたどり、三宅洋平の軌跡との重なりをはかりながら、三宅洋平の「選挙フェス」を追ってみました。これは、そのときに書いたものの一部です。「群シュウ」というときの「シュウ」ということばに気をつけて、見てください。

わーっと人が出てきて集まった、そのもうひとつ先というのはどうなんだろうか、ということあります。群れ集まる、という意味での「群集」から「群集」になる。さらに、もっと意識的に集まって行って、自分たちの意思を国家にぶつけよう、とか。そういうところにまでいくときに、その「群集評議会」は〈民衆(ピープル)評議会〉になるんじゃないか、と……そんなことを、僕はいつも夢想しているんです。

最近のわれわれの周囲にあったこととして、三宅洋平の「選挙フェス」は、ある種の幻想を垣間見せてくれた面がありました。そこであったある種の萌芽みたいなことを大事にしたいと思ったのでした。

いわゆる「新左翼」の党派の新聞を、インターネットでみてみてください。この間の「総がかり行動」に、向こうをはってじゃないけれど、どれも「左翼的結集を！」みたいなことを言っている。だから、全部「総がかり行動」に回収されたくない思いは、みんなにあるわけです。けれどもいま、「総がかり行動」と違うあり方が、人々の目に視えない。

このかんの台湾の「太陽花革命」に触発されながら、いまの「戦争法案」反対運動は、言ってみれば「60年安保闘争」以来の多くの人々の動きが生まれているわけですが、なんかすごくはがゆい。それはそれで、貴重なことですが。この、いまの現状のよくわからなさみたいなところを、なんとか突破したい。すべての問題は、100か0（ゼロ）じゃないのであって、ある種の可能性みたいなものが生まれるということは、いつだってあるということです。人びとの結集の量的拡大が氾濫する瞬間みたいなことがありうるということだし、そういうことがなにごとかの〈予兆〉にあたることではないかというふうに、みたいわけです。

ここで、本当に考え本当に行動しなければいけないのは、〈21世紀の安保闘争の方へ！〉ということではないでしょうか。

それを具体的ななかみで言えば〈街頭民集評議会運動〉みたいなものを創り出すことではないか、と思います。

人びとが、いろんな単位で国会議事堂前に集まってきている。だけどそれは、〈われわれが民集評議会になろう！！〉ということになっていない。そういう言い方をしていません。それは事態にふさわしくないから言わないのかそういう過剰なことは言わないのか、つつましくやらなければいけないことをつつましくやろうということなのか、なにかのセーブ——のようなもの、議会制民主主義を、下からの民主主義を求める行動で、最大限引っ張りたいという枠のようなものがかかっていて言えないのか、よくわかりません。

だけど、僕は言いたい。

## 21世紀の安保闘争の方へ 街頭民衆評議会運動を創り出せ！ 「街頭民主審議」を！

それが、民衆の政治にむかう意志というものを決めるんだ、と。

国家なら国家に突きつけるんだ、というそういうことというのは、どうしても、あいだに政党や議会というものが入るとぼかされていますね。そこをもうひとつ突破して考えよう、というふうには、日本の運動になっていません。もちろん台湾の場合だって、一時期立法院を「占拠」したということです。だけど、あのようなことが起こるといことは、ものすごく大きなことです。それを受け継いで、じゃ次はどうするか、という話になっていくようなことだと思うのです。

日本の場合は、せいぜい「総がかり」といっている。いろんな系統のものが集まって「総がかり」といっている。そういう形で、国会にインパクトを与えよう、と。あわよくば、安倍の意思をくじけ、ということなのではないでしょうか。

僕は、「もう政党の連中は、全員引き下がってくれ！」と言いたい。僕は、7月15日の衆議院特別委員会での「審議打ち切り」のシーンが、頭にこびりついて離れないのです。あのときの反対する野党議員たちの振る舞いを、小さなバナーを掲げておずおず小さな声をあげた彼らの行為を見た時に、ものすごく滑稽だと思いました。ものすごくばからしいと、思いました。

なぜ彼らは、国会を包囲している人びとを招き入れなかったのか？

なぜ彼らは、国会を、そこをしめるべき人びとに返さなかったのか？

なぜそう叫んで、われわれは国会で「路上集会」をひらかなかったのか？

諸君、われわれはいつから「議会主義者」になったのか？

「ミンナキエロ！ヒトリモノコルナ！」——このことばは、2001年12月にアルゼンチンを襲った激烈なネオリベリズムに抗して、民衆蜂起した時に、言われた有名なことばです。この国代表制民主主義に対する、決定的な不信任の表明です。政府機関から、「オマエラミンナデテイケ！」と。

なぜ、僕らはそういうふうには言わないのか。そこは、非常に微妙なことだと思います。ここが、かなり決定的な違いなのではないか、という気がしています。「誰も残ルナ、ミンナ消エロ！」——そういうことを言わなければどうするんだ、という思いが、このかんずっと僕のなかにつまっています。

国会における「代議制」というものが、うまく作用していないのではないかと言うことがいわれてすでに久しい。けれども、「野党はがんばっている」と、多かれ少なかれ人は思っている。確かに、国会審議で野党が引きだしているものが、ないとは言えません。しかし、お互いの連携が相手の出方に応じてしか言えていない。本当の勘所みたいのところへいっていないという気が、すごくします。国会議事堂前のデモでも、「野党のみなさん、がんばってください。私たちは外でがんばりますから」みたいな印象がとても強いです。結局、「議会制民主主義+外の運動」という図式が壊れない。しかも、その図式を「壊す」というところにまでど



うしても進めない日本の現状が、このかんずっと続いていると思います。

どう考えても、「代議制民主主義」といいますか、そういうもののもっているいかがわしさみたいなものを、最終的には、うんと言えない人間というものがあるわけです。

前に、市野川容孝さんの言っている「セキュリティ」の問題を取りあげましたけれども、そのなかで市野川さんが、かつてのドイツ革命の時のローザ・ルクセンブルグのうごきを中心に、「議会制を超える議会制」という言い方をされていました。そういうことを、まともに考えた方がいいのではないかという気がしてます。そういう発想なり思想の〈系譜〉というものが、ないわけではないので、その辺を、僕らは三宅洋平という人を取りあげたときにも言おうとしたわけです。「議会制を超える議会制」の現在的ありようが、〈発明〉されなければならないと。

今日の映像の一番最初に、「騒乱譜」というときの僕の基本的なモチーフとでも言うべきことばを入れました。

忘却のかなたに追いやられたかに  
みえる記憶は、持続的に過去を想起し続ける  
想像力によって、現在の中に追体験される。  
そして、過去は過去でなくなり流動を始め、  
現在に向かって覚醒する。  
この時、無意識のままに流されていった現在も  
流動を開始し、今を作る無意識は打破される。

過去というものを見る目が変わったり、過去への認識が変わったりするときに、そこから流れてくる現在についても認識が変わってくるし、過去－現在－未来というもののつながり方自体が、あるものを見直すことによって違ってきます。ですから、過去のものを軽んじてはいけなし、私・たちが過去のものからどれだけのことを学べるかということが、ひるがえって現在への〈問い〉になって返ってくる。そうしたことが〈系譜〉をつくっています。

たとえば、路上を「占拠」する。スペインで... ギリシャで... エジプトで... アメリカで... 台湾で... 香港で...。僕は、民衆の〈伝播力〉のようなものを信じたい。それは、このように海を越えてはるか遠くまで及ぶものであったり、また、場合によっては数百年の時を隔てて現れるというようにして、〈伝播〉していきます。そのように考えれば、自分たちが全く孤立しているということではないはずで、過去を想起するという営みを欠かさず続けながら、絶えず現在の水準をはかり、自分たちがどういう〈系譜〉の上に立っているかということを意識的に考えていくことが、大事なんだと思います。

どんなにささいなことであれ、あるあり方があることばを呼び寄せ、そのことばがさらに次の〈なにか〉をひらいていく。そのように、ことばとできごとの〈あいだ〉を自分たちが往復させていくというイメージで考えてみたいと思います。そのようなこととして事態を視ていないと、どんなにすごいことが起きていても、それをすごいことだと思えないままになってしま

っていることが、いくらでもあるわけです。そのようなことを見る眼というものを、どこかで大事にしたいと思うのです。

そのように、自分たちが触発されるものはいろんなところにあるのだから、世界のどこで何が起っていても、それを自分たちのモデルにすればいいのです。もちろん、そうした営みは、それぞれある歴史的な風土の中の人間の身体性に根付いていて、そうしたことをあまり簡単に考えてはいけないということも、強くあります。しかし、その一方で、それに挫けていたら、自分たちのように何も無いところにいる者はどうするんだ、とも感じています。

今、大事なことは、〈過去〉をいかに〈引用〉して、現在を揺るがすようなものをそこからどうつかむか、ということだと思います。

先ほども言ったように、僕には、日本の大きな〈騒乱の系譜〉をたどりたいという想いが、ずっとあります。

「みんなが勝手に踊って行きたいんだ。そしてみんなのその勝手が、ひとりでに、うまく調和するようになりたいんだ。それにはやはり、何よりもまず、いつでもまたどこでも、みんなが勝手に踊るけいこをしなくちゃならない。むずかしく言えば、自由発意と自由合意とのけいこだ。」

これは、今から90年前に、大杉栄が、いわゆる「大杉一派」の「演説もらい」への批判に対する反批判を行った際のことばです。そのように、「騒乱」というものは、ところを選ばない。人間が存在するところには、どこだって「騒乱」が起こるんだ、と僕は思っています。

例えば、フランス革命のときに、誰かが「バスチーユヘ！」と叫ぶ。そのことばが、雷鳴のように、人々の心をつかむということがあるんですね。その時に、人々は、日常性に「帰る」ということを忘れる。そうした時に、初めて、隣に自分といっしょに誰かが走っているんだということが分かる。ひとりのわたしがいて、「あ、あそこに自分と同じように、そこを解放するために、バスチーユヘ向かって誰か走っている」と、そこで初めて気付く。

そのように、何者でもない者になるということへ行き（生き）つくときに初めて、〈となりのひと〉が視えてくるし、お互いをそうした存在として確かめ合うことで、〈わたし・たち〉というものが生まれる可能性が出現します。しかし、そのようにして生まれる〈わたし・たち〉によって成立する共同性というのは、日常性に帰ってしまえば、すぐになくなるようなものでもあります。

ですから、そのような〈わたし・たち〉を見いだすためには、〈路上〉に出っきりにならなければいけない。〈路上〉の密度や深度というものは変わりうるし、それを絶えず前に向かって拡大させていくわけです。〈路上〉に響きわたる「バスチーユヘ！」というかけ声が、一挙に人々を〈わたし・たち〉として凝集させる。「そんなふう人間というものは動けるんだ！」、「人間というものは、そんなふう『いる』ことができるんだ！」というように人間の可能性を捉えることができるあり方を、どうやってみんなのものにしていくか、ということだと思います。人間の可能性というものは、時代によって大きく左右されるけれども、決してゼロにはならな

いものだと思うのです。

先程も言いましたように、人々が自分に与えられている規定性を打ち破って溢れ出てしまうということが、人間にとってのある根源的な欲求として出てくる。それが、とても大事なことだと思います。〈ピープル〉ということばを原理的に定義することは、非常に難しいことで、それは、歴史的には、ルソーやホッブスにまでさかのぼって考えなければならないことばでもあるわけですし、そう簡単には言えないことです。

そうではあります、とりあえず、これから先、私・たちがいろんなことを考えていくときの一つの手がかりになるようなこととして、以上、お話ししたように考えてみました。

〔〈ピープル〉とは常に国家とその法に先だって存在する権力の究極の源泉であり、自らを何らかの形で集団として政治的に組織し、自由と平等、正義と平和の原則に基づく秩序を創り出す能力を備えた根源的な立法の主体である。〕

このような発想から、〈25時行動委員会〉の当面の課題を「ピープルの創り方」とでもいうプロジェクトとしてすえたい。一方で、今日のように「騒乱譜」の系譜を「ピープルが生まれるとき」としてフォローし、他方でまさに「敗戦／戦後70年」にわたる負の累積としてある「安保体制」解体を「21世紀の安保闘争」として担うピープルを創り出していく構想を見極めていく——そんな試みを「ピープルの創り方」として考えるプロジェクトにとりくむことを、提案したい、と思っています。